

## 国立教育政策研究所 令和3年度プロジェクト研究

「社会情緒的（非認知）能力の発達と環境に関する研究：教育と学校改善への活用可能性の視点から」

### 発達調査チーム 研究報告書

#### 「新型コロナウイルス感染症流行下における児童生徒の社会情緒的 （非認知）能力をめぐる状況：流行初期に関する文献調査」

##### 【研究成果の概要】

プロジェクト研究「社会情緒的（非認知）能力の発達と環境に関する研究：教育と学校改善への活用可能性の視点から」における「発達調査チーム」では、新型コロナウイルス感染症流行下における児童生徒の社会情緒的能力に関する文献研究を実施した。

新型コロナウイルス感染症の流行、そして様々な感染症対策が続けられる中、児童生徒の過ごし方や学び方には変化が生じており、児童生徒の社会情緒的能力にも影響が及んでいる可能性が考えられる。本研究では、我が国の児童生徒の社会情緒的能力に生じた変化や影響の全体的な様相を捉えることを目的に、令和2年9月から令和3年3月末にかけて、主に国内で実施された各種調査や研究を収集し文献研究を行った。

ただし、研究の展開状況として、児童生徒の社会情緒的能力自体に関する調査研究はまだ少なく、一方で、新型コロナウイルス感染症流行下における児童生徒の心身の健康、日常生活、家庭での過ごし方、学習の仕方や意識等に関する調査や研究が多く実施されていた。本研究ではこれらも社会情緒的能力と密接に関連すると考え、幅広く検討対象とした。なお、研究実施期間に収集可能であったものは主に、国内感染の第1波、第2波頃に実施された調査研究であり、本報告書の内容は感染流行の初期の時期に関する知見の整理、考察となっている。

本研究では、大きく三つの視点に基づき知見を整理した。第1章では、新型コロナウイルス感染症の流行下における児童生徒の健康、心理面、行動面、生活における変化と影響についてまとめた。第2章では、学校の休業や、感染症対策のための教育環境の変化、活動の変化と、児童生徒への影響について論じた。教職員の意識についても取り上げた。第3章では、感染症への不安や偏見・差別、感染症に対する学校での対策や危機予防の視点、教育への示唆についてまとめた。終章では、今後の社会情緒的能力に関する研究と教育への示唆として、児童生徒への影響の長期化に注意する必要性、並びに、感染症流行などのリスク下で重要となる社会情緒的能力として、特に感情の管理、制御の内容や捉え方を再考する必要性を示した。

## 1. 調査研究の目的・概要

### (1) 調査研究の目的

本報告書は、国立教育政策研究所プロジェクト研究「社会情緒的（非認知）能力の発達と環境に関する研究：教育と学校改善への活用可能性の視点から」（令和2年度～令和5年度）の一部門である「発達調査チーム」が実施した「新型コロナウイルス感染症流行下における児童生徒の社会情緒的（非認知）能力への影響」に関する文献研究の成果をまとめたものである。

新型コロナウイルス感染症の大流行を受けて、我が国でも様々な対策が講じられる中、学校の休業、学習や学校での様々な活動の休止、中止や変更等が生じ、児童生徒の学び方や過ごし方にも変化が起きている。こうした変化の中で、児童生徒の学習面のみならず、児童生徒の心、自分や友達への気持ち、人間関係や社会性等、いわゆる社会情緒的（非認知）能力にも、影響が及んでいる可能性がある。そこで本研究では、我が国の児童生徒の社会情緒的能力に生じている全体的な変化や影響の様相を明らかにすることを目的に、日本国内でデータを得て実施された調査や研究を収集し、その知見の整理、検討を行った。そして、今後の社会情緒的能力の教育として、感染症を含む様々な危機下における心身の安定保持のための工夫など、必要と考えられる内容や視点についても検討した。

### (2) 調査研究の概要

令和2年9月から令和3年3月末までにかけて、日本国内の児童生徒、その家庭、学校等に関する各種調査、研究、アンケート、事例等を収集し、その内容を整理、検討する文献調査を行った。本研究はこの時期に収集可能であった情報に基づいてまとめたものである。

文献研究においては、第一に、一定規模のサンプル数に基づき定量的な分析結果が示されている調査、研究を中心に検討対象とした。国内の児童生徒にどのような変化や影響があったのか、より全体的な姿に着目することを優先的に取り組んだ。第二に、新型コロナウイルス感染症の流行は、長期間に及んでいることもあり、時期によって児童生徒の様子や影響には違いがあると考えられた。このため各調査や分析が実施された時期を明確に示し、流行下においても時間軸上の変化に注目した。ただし、本研究の資料収集期間で入手可能であった知見は主に、国内感染の第1波、第2波頃に実施された調査研究に基づくものであった。このため本研究の内容は、感染流行の初期における児童生徒の様子についての知見整理である点に留意されたい。

また、児童生徒の社会情緒的能力に関する変化や影響に関する調査研究に焦点化して文献研究を開始したものの、そうした調査や研究はまだ多く実施、ないし公開されていない状況であった。このため、児童生徒の心身の健康、生活、家庭や学校での過ごし方、学び方に関する調査や研究についても文献研究の対象として検討を行った。

## **2. 研究成果の概要**

本報告書は、序章で研究目的と背景を示したのち、第1章から第3章にて文献研究の内容を示し、終章で結ぶ構成となっている。第1章では、新型コロナウイルス感染症の流行下において児童生徒の心理的健康、身体的健康、行動、生活に起こった変化に着目し、国内の調査、研究で得られている知見を整理して示した。第2章では、学校の休業や、感染症対策のための教育環境の変化を取り上げ、その変化を経験した児童生徒への影響について、各種の調査や研究の知見を整理して概観した。第3章では、感染症に対する学校での対策や危機予防の視点、感染症流行に伴い人々の心に生じやすい不安や偏見・差別という問題と、その予防的、教育的取組についての示唆を行った。終章では、今後の社会情緒的能力に関する研究や教育への示唆として、新型コロナウイルス感染症の流行における児童生徒への影響が長期化する可能性に十分に注意をしつつ、今後、感染症を含む様々なリスク下における様々な感情の管理や制御について新たなる検討していく必要性などを示した。以下、各章の概要を示す。

### **(1) 第1章「児童生徒の心理、行動、生活の変化と影響」の概要**

新型コロナウイルス感染症の流行下における児童生徒の心理、行動、生活について、国内の調査、研究の知見を整理して示した。また、家庭での過ごし方、家庭内での親子間のやりとりの様相や、児童虐待、自殺に関する調査も概観した。児童生徒の健康や心理状態への影響の及び方は複雑であり、現状では影響のプロセスや機序に関して十分に検討されている状況ではないが、児童生徒の年齢、性別、家庭環境などの特徴に注目しながら考察を行った。また、最終節では発達障害のある児童生徒の様子にも触れた。

#### **第1節. 児童生徒の心身の健康状態**

全体として幅広い年齢の児童生徒に精神的健康状態の低下が認められた。特に中学生や高校生などに否定的影響が大きく、また、長期的に及んでいると考えられた。感染症流行と

対策による影響は児童生徒の親や家庭にも及んでいる。実際に親の精神的健康状態が悪化しており、その親の状態が子供の精神的健康状態に影響するという知見も示した。生活については、特に学校の休業期間中に生活リズム（起床、就寝時間）のずれや運動不足、スクリーンタイム（電子機器や端末を使用する時間）の増加等の変化が認められた。

## 第2節. 児童生徒の社会情緒的能力

幼児から小学生までを対象とした研究によると、流行の拡大に伴う第1回目の緊急事態宣言下において、子供の多動、情緒的問題、仲間関係の問題などは、流行前と比して変化がないことが示された。一方、他者を思いやる向社会的行動は、第1回目、第2回目の緊急事態宣言下の方が高いことが認められた。また、ソーシャルディスタンスが求められる中での人間関係について、1回目の緊急事態宣言中は親子間の心理的距離が近くなり、子供と他者との心理的距離は広がるという変化が見られた。ただしその後の追跡調査では、親子間の心理的距離が拡がり、他者との心理的距離が近くなるという変化が生じていた。

## 第3節. 親子関係や家庭でのやりとり

家庭内での親から子供への関わりについて、子供の気持ちの受容や、様々な対策、変化に関する理由を説明するといった「好ましい関わり」も多く行われている一方で、子供を怒鳴る、たたくといった不適切な関わりも生じていた。特に、不適切な関わりは幼児や小学生児童の親において多く報告されていた。また、新型コロナウイルス感染症の流行下において児童虐待が増加していることを示した。

## 第4節. 自殺

感染症流行下にある令和2年について前年よりも自殺者が増加しており、特に女性において増えていた。また、児童生徒を含む10代、そして20代という若年層での増加が大きく、中でも高校生の女子生徒において大幅に増加していた。背景、理由や影響の機序についてはまだ明らかではないが、児童生徒の命を守るために知見に基づく支援策の必要性を論じた。

## 第5節. 発達障害のある児童生徒の様子

対面でのコミュニケーション機会が減ることなどによりストレスが低下しているという報

告もある一方で、適切な対人距離の調整の難しさや、心身の不調を感じているという様子を示した。特に、発達障害児者の半数以上がマスクの着用に関難を感じていることや、マスク着用時のコミュニケーションに関する困りごとも多いことを示した。

## **(2) 第2章 学校・教育環境の変化の経験と児童生徒への影響**

本章の目的は、新型コロナウイルス感染症への対応による学校・教育環境の変化と児童生徒への影響について、児童生徒の学習の状況や意識、特別活動の実施、教員への影響なども含めて、各種の調査、研究の知見に基づき概観し、今後の課題について考察することであった。第1節では新型コロナウイルス感染症への対応による休業と児童生徒の学習、第2節では特別活動の実践状況と実施上の工夫、第3節では新型コロナウイルス感染症への対応に伴う教員への影響について述べた。

### **第1節. 学校の休業と児童生徒の学習**

本節では、国内の学校の臨時休業の状況及び休業中に学校が課した家庭における学習の内容と支援の方法、児童生徒の家庭での学習状況、そして、臨時休業中の学習指導上の課題に着目し、ICTの活用状況も含めて調査、研究の結果を紹介した。保護者を対象とした調査結果からは、学校の臨時休業中は児童生徒の家庭学習時間に減少傾向が認められるとともに、学習の質や意欲に関しても悪化・低下の傾向にあることが示された。また、学校の臨時休業中、ICTを活用した児童生徒への学習支援や、学習状況の把握があまり行われていなかったことも示された。新型コロナウイルス感染症への対応を契機に、いわゆるGIGAスクール構想が前倒しされているが、教員や児童生徒のICT利用への動機づけを高めていくことは今後の課題であると考えられた。

### **第2節. 特別活動の実践状況と実施上の工夫**

本節では、新型コロナウイルス感染症流行下における特別活動の実践状況と実施上の工夫について概観した。第1回目の緊急事態宣言が早い段階で発令された地域を中心に実施された調査によると、臨時休業中・分散登校中、特別活動の実施率は、小学校の少なくとも2-3割であるとの結果がみられた。また、学校再開後は小学校と中学校で特別活動の実施率の傾向に違いが見られた。ただし、新型コロナウイルス感染症の流行下における特別活動の実施の程度や内容による、児童生徒の社会情緒的能力への影響について、その関連を問う調査研究が現段階では見つからず、この影響について検討することはできなかった。

### 第3節. 新型コロナウイルス感染症への対応に伴う教員への影響

本節では、教員の働き方及び教員の意識への影響について取り上げた。教員の働き方への影響として、学校の臨時休業中は教員の時間外勤務が減少した一方で、学校再開後は前年度よりも時間外勤務時間が増加する傾向にあることが示された。この時期の業務負荷の認識には教員の経験年数による差が見られた。また、教員の心理状態への影響として、バーンアウト状態を示す指標で不健康状態に陥っている教員の割合が回答者の7割以上を占め、平時の調査結果の値よりも高いことが示された。この他本節では、教員が感じた不安、ストレス要因、教育のあり方についての認識や工夫についても各種調査研究の結果を報告した。

### (3) 第3章 学校危機予防と感染症に関する教育

本章の目的は、次の3点であった。まず、学校における危機の1つである感染症に予防対策を講じる上で、これまでの歴史の中で学校がどのようにこうした感染症の流行を乗り越えてきたかを概観した。次に、感染症に付随する偏見や差別の問題が生起するメカニズムを理解し、具体的に対処するための教育のあり方を考察した。最後に、子供たち自身の感染症に対する理解の仕方や、その理解に関する発達の変化について研究知見を概観し、子供たちにどのように教えていくことが、児童生徒の安全安心を脅かす事柄に対する最大限の防御につながりうるのかを検討した。そして、学校危機対応の視点や、ソーシャル&エモーショナルラーニング（社会性と感情の学習）の視点から、今後の教育において重要と考えられる工夫についても論じた。

### 第1節. 学校における感染症予防と対策

本節では、学校で予防すべき感染症や学校保健安全法について理解し、学校内での児童生徒の罹患の予防策を最大限に講じるための知識や歴史について概観した。現在の新型コロナウイルスの流行をめぐる状況の理解、並びに対策を考える際、過去の感染症流行時における学校での対応を振り返ることが役立つと考えられるため、これまでのインフルエンザの流行や、特に日本で児童生徒を中心に流行したアジア風邪に対する学校の対応を紹介した。これら過去の例においても、学級及び学校閉鎖の時期や期間の決定が、その後の流行拡大を予防する上で重要との示唆がなされていることに触れた。また現在取り組まれている新しい生活様式についても、今後、科学的なエビデンスを踏まえて確立されていくことが目指される。

## 第2節. 感染症に対する不安・偏見・差別の予防と教育

本節では、ウイルス自体の感染の恐ろしさと同時に、人々の不安や、不安ゆえに互いを遠ざけようとする差別や偏見など、人々の心理状態の「感染」について取り上げた。今回の新型コロナウイルスの流行において、医療従事者への差別、罹患者への差別、人種差別、治療を巡っての年齢の差別など、多くの偏見や差別が生じた。こうした差別や偏見をなくしていくためには、何故このようなことが生じるのかというメカニズムを、より多くの人々が理解することが求められる。そして、正しい知見のもとに、どうすれば互いに他者を差別したり偏見を持ったりしないようにコントロールできるかを考察した。

## 第3節. 新型コロナウイルス感染症への対策と教育の充実にむけて

本節では、児童生徒自身が安心安全な行動を決定選択していくためにも、まずは、子供たち自身のこうした感染症への理解の発達を明らかにする必要があると考え、幼児期からの「感染」の理解についての研究を概観した。年齢によっては「感染」の理解が十分でないために、対策を十分にとることが難しいことも懸念されるが、一方で、子供たちの理解の仕方や特徴を知ることで、子供たちへの教育において必要な工夫も明らかになると考えられる。そして、子供の理解状態の考慮や、学校危機対応の視点など、新しい考え方に基づいた今後の教育の可能性や、教育関係者の互いの創意工夫のある取組を広く共有していくことへの期待について論じた。

### (4) 終章 社会情緒的能力に関する今後の研究及び教育上の課題

本文献研究ではコロナ禍の児童生徒における主に社会情緒的（非認知的）側面の発達と教育に対する影響に焦点化した研究のレビューを行った。流行の初期に実施された研究知見から垣間見えた影響が、今後、長期間に亘っていかなる形で残存、あるいは消失していくことになるのかは、更なる研究知見も待ちながら精確に評価する必要性、また、個々の児童生徒における影響の受けやすさの個人差に留意する必要性について示した。

また、以前から世界規模で重要性が議論されてきた社会情緒的能力の育成であるが、コロナ禍の経験を通して、その中身を見直す必要性についても論じた。例えば、“VUCA”とも称される曖昧で不確実、複雑な現代において、また、感染症流行など多様な物理的・社会的リスクが増している中、自らそれらに対処することや、リスクに絡む様々な感情の管理・制御の必要性が高まっている。旧来、「感情の管理・制御」と言えば、負の感情の抑制、正の感情の増進が暗黙裡に是とされてきた。しかし、怒りや不安は危機への予防的準備を促す機能

もっており、今後は、むしろ怒りや不安を適度に保ちながら、それをいかに適応的な行動に結びつけ得るかということに関わる実践的な知恵が重要になるのではないかという視点を示した。